

小林秀雄 初期批評と形式主義論争

野村幸一郎

はじめに

「アシルと亀の子」Iは、昭和五年四月、『文藝春秋』に発表されている。冒頭近くで、小林は次のように述べている。

批評家諸君の間では、符牒は精神表現の、或はその伝達性の困難を、故意に或は無意識に糊塗する為に姿をあらはして来るのだから話が大変違つてくる。この困難を糊塗するといふ事は、別言すれば、自分で自分の精神機構の豊富性を見くびつて了ふことに他ならない以上、見くびられたこの精神機構の豊富性の恨みを買ふのは必定であつて、符牒は勝手に反逆し、自分の発明した符牒が人をまどわずと同程度に当人を誑かす。

「様々な意匠」⁽¹⁾で語られた「内面の論理」「宿命」「生活」「情熱」が、「アシルと亀の子」Iでは、「精神機構の豊富性」と言い換えられている。さらに、それを置き去りにする形でしか成立し得ない、つまり、その豊富性の「糊塗」を前提としてのみ成立する「意匠」としての言葉が、ここでは「符牒」と言い換えられている。「様々な意匠」で展開された言語観の延長上に、「アシルと亀の子」は成立している。

「アシルと亀の子」Iでは、中河與一『形式主義芸術論』、大宅壮一『文学的戦術論』⁽³⁾が取り上げられ、それらに対する批判を起点として、批評が展開されている。形式としての芸術を唱え、内容(社会主義イデオロギー)主導の芸術を否定した中河、社会主義擁護の論陣を張る大宅、両者の芸術論を取り上げ、双方を批判的に解析していくところに、その眼目がある。

小林の大宅批判については、拙稿⁽⁴⁾で、すでに考察している。ここでは、「様々なる意匠」の後継作品として「アシルと亀の子」を位置づけた上で、『形式主義芸術論』に対して小林が、何をどう批判したのか、その基底に横たわる小林の批評上の立場はどのようなものであったか、明らかにしていきたい。

形式主義論争

考察に入る前に、まずは形式主義論争の経緯を説明しておく。

形式主義論争は、プロレタリア文学運動の論客、平林初之助、蔵原惟人の主張に対する、横光利一や中河與一の反論という形で起こった。平林や蔵原が、形式が内容に先走ることを警戒し、内容(政治イデオロギー)が、新しき芸術形式を決定すべきことを主張したところ、横光や中河はその主張の核心に、文学の政治への従属を見て取り、反論を開始したのである。

中河は、プレハーノフの「存在が意識を決定する」という命題を援用しつつ、ならば芸術においても「形式が内容を導き決定する」はずであり、この点において、プロレタリア文学批評は矛盾していると、批判している。したがって、中河の言う「形式」とは、芸術の様式・スタイルを意味しているのではない。「形をもったもの」としての、ある素材が具体化され、何らかの形態と構成をもって、眼に見える形で具現化された、現象

としての芸術存在そのものを意味している。

中河は『形式主義芸術論』において、蔵原惟人を批判して、「内容は絶対に形式の前には存在し得ないのである。／＼若し存在し得ないならば何故に影響しあふことが出来るか。／＼私は『内容と形式とが相互に発生しあふ』といふ陳腐な説に対しては絶対に反対である」と述べている。

中河が批判しているのは、『東京朝日新聞』昭和三年一月二十八日に掲載された蔵原の「形式について」という批評文である。ここで蔵原は「内容と形式とは、ヘーゲルの表現をかりていへば『相互に発生し合ふ』のである」と述べている。しかし、細かく読んで行くと、蔵原の主張の中心は、芸術表現上の技法と表現内容は相互に影響を与えながら発生していくという点にあるのではなく、形式も内容も「存在」によって決定されるというところに、論旨の根幹があることが分かる。

果して芸術の形式が「客観」であり、その内容が「主観」であるのであらうか、いい換へれば、芸術の形式が「物質」であつて、その内容が「精神」であるのであらうか？ 我々の理解する所では、芸術そのもの、全体が、即ちその内容も形式も、共に物質的なるもの——社会の物質的生活の反映であつて、物質そのものではない。⁽⁵⁾

この蔵原の言辞から分かることは、両者の論争がそもそも「存在」という概念定義の不一致を抱えており、中河による、故意かどうかは分からないが（おそらく故意だろう）、概念内容のすり替えが、論争を不毛なものにしていることである。中河の場合、「存在」とは「形式」を意味しており、外在化された芸術表現それ自体を指している。それに対して、蔵原の場合、「存在」とは「社会の物質的生活」を意味している。芸術の内容も形式も「社会の物質的生活の反映であつて、物質そのものではない」、つまり、蔵原にとつて、「物質」とは社会の生産関係以外の何ものでもなく、芸術の内容も形式もその反映、イデオロギーにすぎない。

その蔵原を指して中河は、プレハーノフの命題をねじ曲げていると糾弾している。蔵原自身が訳出したプレハーノフ『階級社会の芸術』⁽⁹⁾は、「原始民族の生活の研究は、『人間の意識はその存在によつて決定される』と云ふ唯物史観の基本的命題を何よりもよく裏書きしてゐる」の一句から始まっている。この命題について同書では、「人間の生産的行動が如何にその芸術に影響するかと云ふこと」「存在と意識との、即ち『労働』の上に発生する社会関係と芸術との間の因果関係」と説明している。

今日から見れば、蔵原はプレハーノフに対して愚直なほど忠実である。蔵原にとつて重要なのは、生産上のある社会関係に位置する「存在」のあり方、すなわち、そこに生きる労働者階級の生存様式であり、芸術もまた意識と同様に、その反映として位置づけられている。

その蔵原に対して、芸術の形式が内容を決定するというプレハーノフの主張を無視していると批判したところで、議論が噛み合わないのは当然である。そもそもプレハーノフは、中河が言うようなことは、述べていない。どれだけ好意的に解釈しても、中河の蔵原批判は、きわめて意図的、かつ戦略的な〈難癖〉である。そうでなければ、単なる読み間違いにすぎない。

純粹持続としての存在

小林が「アシルと亀の子」Iにおいて、中河の『形式主義芸術論』に対してきわめて厳しい評価を下すのも、これまで見てきた経緯を考えれば、当然と言えば当然である。

小林はここで、「認識論と技巧論とを一九にしようとする自意識の冒険」について、「昨年来の形式内容の片々たる喧嘩内容が羅列され、これを修正し統一する努力すら示されてゐない」と、酷評している。形式―技

巧が内容―認識を決定するという中河の単純な図式に対して、形式と内容の関係そのものについてその構造を見極め、統一的に把握する努力が払われていないと、小林は批判する。

ちよつと、意外であるが、この文面を見る限り、小林は蔵原に軍配を上げている。蔵原が依って立つマルクス主義文学論そのものについてはひとまず置くとして、その「認識論と技巧論とを一丸にしようとする」姿勢、すなわち、芸術の内容と形式を分けて考えずに、一体化したものと捉えようとする姿勢そのものは、評価している。それに引き換え、中河の主張は、「これを修正し統一する努力すら示されてゐない」。つまり、ふたたび、内容と形式、主観と客観を、分割するような認識の布置の上に、議論が組み立てられており、この点において思想的後退であると、小林は述べるのである。

これまでもしばしば指摘されてきたように、「様々なる意匠」⁽⁷⁾執筆時点において、小林はすでに、マルクスを丹念に読み込んでいる。「人間的思惟に対象的真理がとどくかどうかの問題は―なんら観想の問題などではなくて、一つの実践的な問題である」(真下信一訳「フォイエルバッハに関するテーゼ」というマルクスの認識論に対して、小林は、「人々は、その各自の内面論理を捨てて、言葉本来のすばらしい社会的実践性の海へ投身してつた」と批判していた。この点はすでに拙稿で確認した通りである。小林に言わせれば、マルクスの言う社会的実践は、言語への盲信をその裏側に抱え込んでいる。その結果、社会生活の中でつかみ取られた現実認識が、実はあらかじめ与えられた言葉によって分節化された世界像でしかないことを、忘れてしまっている。小林にとって、大切なものは、言葉の外部、言葉になり得ないもの、抽象化の過程で置き去りにしていった「内面論理」である。

このような小林から見れば「認識論」と「技巧論」の統一の問題とは、如何にして内面の喪失をもたらす言語によって、「内面論理」そのものに肉迫するかというパラドックスの解決に収斂される問題であった。私た

ちが心の中に描く像や、感覚器官を通じて身体に伝えられる感覚そのものは、けつして言葉にならない。しかし、文学はその言葉にならないものを言葉にしなければならぬ。小林が抱えるアポリアはここに存在する。その小林にあつて見れば、中河の議論はあまりにも無邪気なものであり、単に「形式」が意味を決定すると、唱えているに過ぎない。『存在が意識を決定する』と、是は当り前のことである」と小林がここで言わなければならなかつたのは、マルクス主義批評が提示した、「存在」と「技巧」の問題についての意義を正当に理解し、評価した上で、さらにその限界性を指摘しつつ先に進もうとする、小林の姿勢の現れである。

さらに小林はここで、中河が書中で引用している、石原純の言葉を引用しつつ、次のように論じている。

意識が力の場として代表せられ、しかもこの力が時間と空間とから成立する四次元連続体の計量的性質によつて完全に言ひあらはされる以上は、意識は、時間、空間の或る特定な状態に於いてのみに依存させなけりやならない。この場合、「存在は意識を決定する」と、是は当り前なことである。ただ人間の意識を正確に力の場として代表する事が既に神秘的に見えるほど困難だといふに過ぎない。だが、意識が存在のほんのかけらに過ぎぬと考へる以上、意識が四次元連続体の計量的性質を持つてゐるに違ひないと考へざるを得ない。

きわめて難解な文章であるが、一語一語を丁寧に解釈してみたい。

ここで小林は、ブレハーンフの「存在は意識を決定する」という命題を、当然のこととして受け入れている。ただし、その存在によつて決定される意識の構造に、小林の並々ならぬ関心が向けられている点に、注意すべきである。小林は「意識」を、「力」「時間と空間から成立する四次元連続体の計量的性質」を表象したものと言い換えている。プロレタリア文学運動が言うような、帰属する社会階級が意識を決定するという意味とは、まったく異なるニュアンスで語られているのが、分かる。そして、さらに、存在と意識の関係を、「意識」

は「存在」の「ほんのかけらに過ぎぬ」、つまり、「存在」そのものの内実や性格、その質を置き去りにしたまま、「計量的性格」のみを具現化したものが「意識」であると、言うのである。逆から言えば、小林のいう「存在」とは、本来的に「計量的性格」によつてはついに表現し得ないもの、意識化を拒むものであることになろう。

このような議論の分かりにくさは、煎じ詰めて言えば、「存在は意識を決定する」という命題を肯定する小林が、「存在」という言葉の内に、どのような意味を託しているのか、という問題に帰着する。この問題を考えていくにあつて手がかりになるのは、小林におけるベルグソンの受容である。石原純の用語を利用しつつも、小林は明らかにランボーやヴァレリー・ボードレルなどの象徴派の詩人や、その思想的表現であるベルグソンの表現原理を下敷きにして、「存在は内容を決定する」という命題を、捉え直そうとしている。

小林のベルグソンに対する並々ならぬ関心を示すものとしては、昭和三三年五月から三八年六月まで、雑誌『新潮』に連載されたベルグソン論、『感想』がとくに有名である。小林秀雄とベルグソンとの出会いは大学時代にまで遡る。以来、終生に渡つて関心を持ち続けたことは、よく知られている通りである。

もつとも早い時期の言及としては、「アシルと亀の子」Iが発表されたのと同じ昭和五年四月、『近代生活』に発表された「笑に就いて」がある。ここで小林は、「時間も、空間も心も物も一切ひつくるめて自然といふ一つの持続体として、この世を理解したベルグソンには、滑稽といふ意識は、自然といふ生き生きとした持続体中で、弛緩した、機械化した、物質的な、停止的な一段階とみえた」と、いわゆる「純粹持続」という考え方から笑いを説明しようとしたベルグソンの議論を、紹介している。

そして、そのベルグソンは、たとえば『時間と自由』において、次のように語っている。

変更を受けてゐない意識が認めるまゝ、この根底的自我を再び見出すためには、内的な生きた心理的事

実を、先づ、屈折してそれから等質的空間のうちに固化されたその形象から隔離する分析の力強い努力が必要である。言葉を換へて云へば、我々の知覚や感覚や感情や観念は二重の相の下にあらはれる。一つは明瞭適確だが非人格的な相でもあり、もう一つは漠然とし無限に動いて言表の出来ない相であつて、これが言ひ表はせないといふのは、言語は、その運動性を固定しないではこの相をとらへ得ないし、共通領域に落し入れないでそれを自分の平凡な形式に適確させることも出来ないからである。⁽⁹⁾

ここでベルグソンは「自我」を二つの層に分けている。一つは、言語によつて組織化された意識である。ベルグソンに言わせれば、それは「内的な生きた心理的事実を、先づ、屈折してそれから等質的空間のうちに固化」したものの、「表面的自我」であり、生きられた心的現実そのものとは言い難い。今ひとつの層は、そのような意識の底に横たわるような、非論理と非思惟に彩られた、生成変化を繰り返す、流動的な感覚と直観によつて形成された「根底的な自我」である。

いうまでもなく、ベルグソンにとつて眞実であり得るのは後者においてのみである。「表面的自我」とは「表象の記号的性格」によつて組織化され統一された存在であるが、ベルグソンはこのような自我の在り方を、根本的に非眞理であるとして退ける。

ここで有名な「純粹持続」の概念が登場する。世界も内面も一瞬たりとも不変的であつたことはなく、絶えず生成変化をくりかえしている。とするならば、そのような世界や内面を、言語によつて表象するのはついに不可能である、という論理的帰結に達する。なぜなら、言語には言語外対象を固定化して表象する以外に方法はないからである。「根底的な自我」とは、表象化される以前の非言語領域に属する精神の「純粹持続」そのものを意味している。

ベルグソンは、「内的自我、感じたり情熱に燃える自我、思索したり決心する自我は、一つの力であつて、」

「その諸状態や諸様相は密接に滲透し合」うと説明し、さらに「真の持続の外延的記号である等質時間の底に、異質的諸瞬間の互に相滲透する持続を、意識状態の数的多様性の底に性質的多様性を、諸状態のはつきり規定されていゝる自我の底に、継続が融合と組織とを含む自我を、注意深い心理学は見分ける」と、説明している。言葉によつて、あるいは、記号によつて、論理的、合理的に説明された心理とはそうであるがゆえに、すでに「内的な生きた心理的現実」から乖離している。内面世界においては、言葉のレベルにおいては対立関係にあるような諸感覚が、時には融合し、分離し、生成と変化と消滅を、繰り返している。

このようなベルグソンの思想を踏まえれば、小林が形式主義論争に言及して、「存在は意識を決定する」という命題を当然のことと受け入れつつも、「意識が存在のほんのかけらに過ぎぬと考へる以上、意識が四次元連続体の計量的性質を持つてゐるに違ひないと考えざるを得ない」と、付け加えた理由も、はっきりしてくる。小林にとつて「意識」とは「存在のほんのかけら」にすぎない、すなわち、プロレタリア文学批評が言う社会的実践主体が、小林が言うところの「意識」を意味しており、そのような表象体系の基底に横たわる、広大無辺な非言語領域の総体を指して、小林は「存在」と呼んでいるのである。数字も言語も「純粹持続」を本質とするような「内面論理」を固定化し、不変的なものとして表象してしまふ。そうである以上、「意識」は、ついに、内面と世界の質を問うことなく、「計量的性格」のみを表象することになる。

つまり、蔵原、そして、プレハーンノフの命題を、小林は、「存在」概念を非言語領域まで拡大した上で肯定しているのであり、結果、小林の批判対象は最終的には中河の議論ではなく、プロレタリア文学理論そのものにまで達することになる。より詳しく言うならば、「存在は意識を決定する」というプロレタリア文学理論のテーゼを肯定しつつも、ここで語れた「存在」の自身に、議論の焦点を絞っていくことで、小林は、「存在」についてのプロレタリア文学理論の不徹底さを照射しようとしている。小林から見れば、マルクス主義芸術理

論は「存在」をめぐる認識の浅さを欠点として抱えているがゆえに、社会的実践と芸術創造を安直に結びつけている、ということになる。『純粹持続』としての「内面世界」(『存在』から見れば、あらゆる社会的実践と結びつくような行動原理、イデオロギーそのものが表層的なものにすぎない。言い換えれば、芸術創造の源である「存在」とは、いかなる意味づけも解釈も拒むような何もものかにすぎない。「我々に取つて重要なのは、現実をわれわれの主観によつて、歪めまた粉飾することではなくして、我々の主観—プロレタリアートの階級的主観—に相應するものを現実の中に発見することにある」⁽¹⁰⁾と主張するプロレタリア文学陣営に向かつて、小林は、その「プロレタリア階級的主観」こそが、言語への盲信の上に成立した虚妄ではないかと、批判しているのである。

絶対言語の思想

これまでもしばしば指摘されてきたが、小林の初期評論は、言語に対する徹底した不信感によつて、貫かれている。言葉は「存在」を置き去りにし、「内面論理」を隠蔽する、したがつて、言葉とその集積であるイデオロギーは、それを真実であると思ひこまされているに過ぎない虚構体系である。これが小林の一貫した主張である。

しかし、この主張は避けようもなく、ある論理的矛盾を引き起こす。それは、そもそも小林が文芸評論家であること、言い換えれば、文学もまた言語によつて成立している以上、小林の主張は文学そのものの存立基盤を崩壊させてしまう可能性を秘めていることである。

当然、小林はこの問題について、きわめて自覚的であつた。彼はプロレタリア文学理論の言葉、日常の言葉、

ジャーナリズムの言葉を一括りにして、認識論的転倒をもたらすものとして否定する、そのもう一方で、文学の言葉、芸術言語を、言語が虚構体系にすぎないことを自覚する芸術家によって発話されたメタ・レベルの言語として位置づける。その結果、文学は小林の批判が当たらない唯一の例外として、つまり、「内面論理」を語り得る言葉として、超越的な位置を占めることになる。それが、「アシルと亀の子」IVで語られた絶対言語の思想である。小林はその末尾近くにおいて、「絶対言語の道とは絶対自然への道だ、絶対自然への道とは絶対特殊への道に他ならぬ。普遍性とは又特殊の絶対的信用以外の何物でもない。芸術上の現実主義とは、心の中にありと外にあるとを問はず、特殊風景に対する誠実主義以外のものを指さぬ」と、語っている。

この言辞もまた、一読するだけでは、その意味するところがよく分からない、難解な表現である。そこで、小林がこのような結論を導き出すに到る論理上のプロセスを細かく分析していくことにする。

「アシルと亀の子」IVにおいて、小林は、まずマルクスが『哲学の貧困』で述べた「不死の死」の下りを引用し、「すべては運動の形態である。人間といふ形態が生産され、人間の脳髓を通過した様々な観念形態が、事実上在るといふに過ぎぬ」と、語る。

マルクスが『哲学の貧困』で言及している「不死の死」については、小林が引用した箇所だけでは内容が分かりにくい。引用されている箇所を含むパラグラフ全体を確認してみると、次の通りである。

社会的諸関係は生産諸力に密接に結びついている。新たな生産諸力を獲得することによって、人間は彼らの生産様式を変える。そして、生産様式を、彼らの生計の変えることによって、彼らは彼らの一切の社会的関係を変える。手挽臼は諸君に封建領主をもつ社会をあたえ、蒸気臼は諸君に産業資本家をもつ世界をあたえるだろう。

彼らの物質的生産力に応じて社会的諸関係を確立するその同じ人間が、彼らの社会的諸関係に応じて諸

原理、諸観念、諸範疇もまたうみだす。

それゆえに、これらの諸観念、これらの諸範疇は、それらの表示する諸関係と同様に、永久的なものではない。それらは歴史的、一時的産物である。

生産諸力においては増大の、社会的諸関係においては破壊の、諸観念においては形成の、一つの不断の運動が存在する。変わらないものは運動の抽象―不死の死―だけである。⁽¹²⁾

このパラグラフは文脈上、マルクスがブルードン経済学の背景にヘーゲル弁証法を見、それへの批判を展開した箇所である。あらゆる運動を抽象化して論理的範疇に還元した上で、理性を中心とした弁証法体系の内に取り込んでいくヘーゲル弁証法に対して、マルクスは、認識論的転倒を指摘する。論理的範疇を不動のものに見なし、あらゆる運動をその中に取り込んでいくという抽象化の操作自体が、実体よりも範疇に真理性を置くような誤謬を前提としている、範疇とは生産様式に支えられた社会的諸関係の影に過ぎず、不変的な範疇など存在しない、社会の変化にともなつて範疇もまた生成変化を繰り返していくというのが、マルクスのここでの主張である。ヘーゲルが範疇を不変的なアイデアとして扱うに対して、マルクスは運動の形態としてみなすべきであると主張したわけであり、それを一言で表現したのが「不死の死」である。

このようなマルクスの議論を受ける形で、小林はまず、「全自然が一つの運動ならば、もはや、人間は自然の外側に立つて、存在する真理を認識し、表現するものとして現れはしない」「すべては運動の形態である。人間といふ形態が生産され、人間の脳髓を通過した様々な観念形態が、事実上在るといふに過ぎぬ」と述べる。マルクスの唯物論的弁証法を一旦は肯定するわけである。蒸気白が「産業資本家」や「労働者」という社会的実践形態としての「人間」を生産し、その「人間」の中に何らかの観念が形成されていく。言葉の「不死」は結局あり得ず、社会的諸関係の運動にしたがって言葉もまた形成され消滅していく宿命を負っている。そして、

人間は言葉によつてのみ思考することが出来る以上、言葉の限界が精神の限界であることになる。言い換えるならば、「精神」とは、あるいは「人間」とは、社会的諸関係の影としての言葉の集積という形態をとつてのみ具象化されることになる。人間精神とは社会的諸関係の影以外ではない。「人間を語るとは文化人を語る事である」「社会は自然の破片である、個人は社会の破片である、人間精神とは言葉を生産する工場以外の何物でもない、言葉を個人とする社会以外の何物でもない」と、小林が言うのは、⁽¹³⁾その謂いである。

その上で、小林はマルクスの言語観に対して修正を迫る。小林はマルクスを批判して、「マルクスの言ふ様に『人足と哲人との差異は、番犬と獵犬との差異よりも小である』。学的認識といひ芸術的認識といひ又五十歩百歩の問題だ」「ただ、困難な点は、人間の全秘密は人間の五十歩百歩的实践のみに含まれてゐるといふ事である」と語る。五十歩と百歩の差、つまり、「学的認識」(學術用語)と「芸術的認識」(文学言語)の一見微妙なものにしか見えないような差異の中にこそ、「人間の全秘密」すなわち、「精神が永遠に言葉の桎梏の下にある」ような人間の在り方を明るみに出す契機が隠れていると言う。

久しい間、人間社会の暗黙の合意の裡に生きて来た言葉は、その合意の衣をかなぐり捨てねばならぬ。合意の衣とは言葉の強力な属性に他ならぬといふ事だ。古来あらゆる最上作家等の前提は、言はば言葉の裸系の洞察に存した事は疑ひない。彼等の方法論はこの絶対の言語(勿論、形而上学的にも形容詞的にも使はれた意味ではない、例へばエンゲルスが絶対自然と呼ぶ場合の意味でだ、以下同じ)を考へずに意味をなさぬ。精神が言葉のみによつて發展し、言葉のみによつて、同時に制約されるといふ事の強烈な意識が、既に絶対言語を予想するものである。

ここで言うところの、言葉についての「人間社会の暗黙の合意」とは、言葉が「内面論理」の具象化ではないにもかかわらず、そのように錯覚していくような言葉の商品的性格、認識論的転倒を指している。小林はそ

のことに自覚的であることにおいてのみ、つまり「精神が言葉のみによつて発展し、言葉のみによつて、同時に制約されるといふ事の強烈な意識」を持つことによつてのみ、商品的性格を切斷したような言葉、すなわち「絶対言語」を獲得できるというのである。

おわりに

最後に、小林が唱える「絶対言語」について、今一度、詳細に検討を加えてみたい。

「内面論理」を具現化した言葉とは如何なるものか。そして、そのような言語がなぜ「絶対」的、すなわち、「永遠に―すべてはそれがはじめにあつたとおりのままにとどまる」ことが可能となるのか。繰り返しになるが、「アシルの亀の子」IVでは、この問題について、「絶対言語への道とは絶対自然への道だ、絶対自然への道とは絶対特殊への道に他ならぬ。普遍性とは又特殊性の絶対的信用以外の何物でもない。芸術上の現実主義とは、心の中にあるのと外にあるのとを問はず、特殊風景に対する誠実主義以外のものを指さぬ」と説明している。「絶対言語」とは、普遍的本質、たとえば、イデアを具象化しているという意味は含まれていない。「絶対的特殊性」、―小林はそれを「世に一つとして同じ石がないその石の存在に到りつく時」発見する「世に一つとして同じ音声をもたぬ一つの石いふ言葉」と説明するのだが―、指示対象としての、世界に一つしかないような個別的で一回的な事物と、ある言葉との結びつきの不動性(碎いて言えば、この言葉はあの時あの場所で見えたあの事物を指しているという絶対的な確信)を伴つた言葉を指している。これを言葉の側から見れば、たとえば「石」という言葉は、今―ここに、あるいは、あの時―あの場所に存在したような一回的な、ある「石」を指すわけであるから、石一般を指す意味での「石」という言葉と比べて、言語外に無限のニュアンスを帯びることにな

る。そして、小林はこの「無限の陰影」こそ、「その人の肉体全体を指す」というのである。

心理とは脳髓中にかくされた一風景ではない。また、次々に言葉に変形する太陽下にはさらされない一精神でもない。ある人の心理とは、その人の語る言葉そのものである。その人の語る言葉の無限の陰影そのものである、と考へればその人の性格とは、その人の言葉を語る、一瞬も止まる事なく独特な行動をするその人の肉体全体を指す、といふ考へに導かれるだらう。⁽¹⁴⁾

この時点で、小林が言語の商品性を切断した先に復権しようとしたものが、言語の身体的性格あることを見えてくる。同様のことが、「様々なる意匠」においても、「彼等が捉へた、或は捉へ得たと信じた心の一心態は、音楽の如く律動して、確定した言葉をもつては表現出来ないものであつた。各自独立した言葉の諸影像が、互に錯交して初めて喚起され得る態のものであつた」と、述べられている。ここだけを見れば、小林の認識の到達点そのものは、「様々なる意匠」と比べて、さほど変化を見せているとは言い難い。しかし、これまでの考察から分かるように、「アシルと亀の子」で小林が、ベルグソンの純粹持続、マルクスの弁証法的唯物論を援用しつつ、自らの立脚点をより構造的に捉え直そうとしているのが分かる。

小林がマルクスを援用しつつ唯物論的批評を展開したという指摘は、これまでもなされてきた。たしかに、小林はマルクスを批判理論として受け入れてはいるものの、そこに止まっているとも言い難い。マルキシズムが提示した存在概念、生産関係によって規定される人間の存在様式を、表層的なものと位置づけ、深層領域に、無限に広がる非言語領域、ベルグソンの言う純粹持続の世界を見ようとする。ここに初期批評における小林の言葉と人間をめぐる認識の布置の本質があつたと、見てよいはずである。

そして、小林にとって、文学の言葉、「絶対言語」とは、その意味を、意識の外部に広がる非言語領域、純粹持続の世界から汲み取ってくるものでなければならず、そうであることによって、言葉は、はじめて美にな

り得るものであったのである。

注

- (1) 『改造』 昭和五・四
- (2) 新潮社 昭和五・一
- (3) 中央公論社 昭和五・二
- (4) 拙稿「意識と宿命―小林秀雄『様々なる意匠』」『京都橘女子大学研究紀要』第二九号 二〇〇三・一
- (5) 「形式について」『東京朝日新聞』 昭和三・一一・二八
- (6) 『改造』 昭和四・九
- (8) (4)と同じ
- (9) 服部紀訳 岩波文庫
- (10) 蔵原惟人「プロレタリア・リアリズムへの道」『戦旗』 昭和三・五
- (11) 『文藝春秋』 昭和五・七
- (12) 高橋義孝訳『哲学の貧困』新潮社 昭和三二・七
- (13) (11)と同じ
- (14) (11)と同じ